

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23242033

研究課題名(和文) 兵士・労働者・女性の植民地間移動にかんする研究

研究課題名(英文) A Study on Colonial Mobility of Soldiers, Labourers and Women

研究代表者

永原 陽子 (NAGAHARA, YOKO)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：90172551

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 18,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀の戦争において植民地と他の植民地との間を移動した人々(兵士・軍夫、軍に関連する労働者、「売春婦」等の女性)に着目し、とくに世紀転換期から第一次世界大戦期を中心に、これらの人々の移動のメカニズム、移動先での業務と生活の実態、様々な出自の人々との接触の内容、移動の経験が帰還後の出身地社会においてもった意味、などについて検討した。その結果、植民地の場における労働と戦争動員との連続性(「平時」と「戦時」の連続性)、兵士の動員と不可分の関係にある女性の自発的・強制的な移動の事実、さらに従来の研究の中心であった知識層の経験とは大きく異なる一般労働者・女性の経験が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We focused on the inter-colonial population movement in the wars of 20th century, particularly in World War I. Among them were soldiers and military-related labourers as well as women who were mobilized for sexual and other purposes. The mechanism of their mobilization, the feature of their work and life in foreign countries, their encounter with people from other colonies and the impact of their war-time experiences on the society where they originated from were studied. In colonial context, war-time mobilization was inseparably related with peace-time labour mobilization and there was a significant degree of mobility of female population. The experiences of those who transcended the colonial borders in imminent situations were greatly differed from those who joined the war voluntarily and later played a leading political role in the colonies.

研究分野：南部アフリカ史、比較植民地史

キーワード：植民地 植民地兵 移動 戦争 世界史 アフリカ 女性

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2004年度から2010年度までに行った二つの科研共同研究の成果を発展させたものである。先行科研では、「植民地責任」概念を提起し、この概念を援用して、植民地体制下の大規模暴力の実態と、それをめぐる当事者たちの歴史認識の問題とを相互に関連させ、脱植民地化の歴史を従来の「帝国史」的枠組みとは異なる視角から明らかにすることを試みた。

そこから、植民地暴力をめぐる「被害」と「加害」の多重性、「植民者」と「植民された者」との重層的な関係をダイナミックにとらえることの必要性が浮かび上がり、そのような関係を象徴する存在である「植民地兵」をとりあげ、本研究を組織することとなった。

2. 研究の目的

本研究では、20世紀の世界で、植民地体制下の戦争に関連して動員された植民地兵ならびに軍の動きと密接にかかわる労働者、また女性労働者（性的奉仕のために動員された女性や「売春婦」等を含む）について、とくにそれらの人々の戦時の植民地間の移動を重視しながら、その実態と意味について検討することを目指した。植民地＝本国間の移動については、イギリスやフランスの場合を中心に、従来の「帝国史」の枠組みの中で一定程度扱われてきたが、それに対して本研究では、「帝国史」の枠組みを植民地側の視点に立って乗り越えることを重視し、植民地の現実に即して戦時の動員の問題を考えた場合にとりわけ重要である、複数の植民地間の人々の移動を重視した。植民地を場とする、あるいは植民地が引き込まれた戦争において、植民地住民の動員は、帝国中枢へと向けられただけでなく、また帝国の範囲内のみで実現されたのでもなかったからである。

一方、従来の帝国史的枠組みでの研究では、植民地住民の兵士としての利用（たとえば英領東アフリカの「アスカリ」、仏領西アフリカの「セネガル兵」など）の実態については一定程度解明されてきたものの、それらが植民地での平時の植民地統治、とりわけその経済体制とどのようにかかわっていたのか、また男である兵士の動員と植民地女性の戦時の動員とはどのようにかかわっていたのか、などの点が視野に入っていなかった。このことから、本研究では、戦時と平時の労働の連続と断絶、および労働・戦争動員におけるジェンダー関係を重視し、植民地の境界を越えた戦時の民衆の経験を、20世紀を通じて段階的に展開する長いプロセスとしての脱植民地化における主体の問題として検討することを目指した。

3. 研究方法

(1) 時期としては19世紀～20世紀初頭の植民地征服戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、植民地解放戦争を対象とした。植民地視点の植民地兵研究のパイオニア的な意味をもつ本研究では、欧米史上の出来事として

の「戦争」を与件として時期区分を行うのではなく、植民地化と脱植民地化の全体的プロセスを見通す立場から、このような長い時間軸を設定する方法をとった。その上で、第一次世界大戦期を重点事例として取り上げることとした。

(2) 地域にかんしては、アフリカを中心としつつ、アジア・太平洋・南北アメリカを視野に入れ、それらとの比較ならびに関連を扱うこととした。

(3) 前記各地および旧宗主国の文書館にて、植民地行政文書、企業関係文書の調査を行い、戦争関連の兵士・労働者・女性の募集・雇用・派遣、帰還の実態についての分析を行った。

(4) (3)の対象のうち、可能なものについてオーラルヒストリー調査を行った。

(5) (3)(4)の調査の結果をもちより、動員のメカニズム・方法、動員先での労働・使役の実態についての比較検討を行った。

(6) (1)～(5)の調査・検討を踏まえ、重点対象としての第一次世界大戦期につき、さらに詳細なケーススタディを行った。

4. 研究成果

(1) 植民地における兵士動員の類型

植民地権力による植民地住民の兵士としての利用はイギリス東インド会社の「シパーヒ」に代表されるようにヨーロッパ諸国による植民地征服の最初期から広く見られた現象であったが、それら初期の「傭兵」的性格のもの（以下、タイプA）と、19世紀末以降の帝国主義時代の植民地体制下で「国民化」される植民地軍の兵士（同、タイプB）の間には大きな差異があった。タイプBの典型は、第一次世界大戦期のフランス領西アフリカの「セネガル兵」であった。第二次世界大戦期の日本軍による台湾人軍属などもこれに含めることができる。

歴史的にみれば概ねタイプAからBへの変化を見て取ることができるが、二つのタイプの間には連続的に多様な形態があり、また、たとえば20世紀後半の南部アフリカ諸国におけるアパルトヘイト体制側の「ブッシュマン兵」の利用にみられるように、タイプAの現代型の利用もみられた。

(2) 植民地兵動員のメカニズム

タイプAの兵士が経済的動機から植民地政府に雇われる者であったのに対し、タイプBは強制的に徴募された者だった。しかし、植民地社会の人種主義のゆえに、植民地軍においては「兵士」は少数に限定され、むしろ軍関連労働に従事する「軍夫」が多かった。タイプAは特権化し、「身分」と化すことも多く、また、特定の民族・人種集団と結び付けられ、いわゆる「マーシャル・レイス」を生み出す例も少なくなかった。

一方、規模においてはるかに大きく強制性の強いタイプBでは、当時者の動機が果たす役割は小さかったが、徴募はしばしば政治的有力者が共同体内の者を「差し出す」形で実現されており、そこでの経済的な地位が大き

く影響していたのも事実である。

(3) 平時の労働との連続性

経済的な理由を背景とする戦時の動員への応募は、平時の労働システムと不可分であった。たとえば第一次世界大戦期南部アフリカでの戦時動員は、それ以前の出稼ぎ労働とまったく同じ仕組み、すなわち同じ地域で、同じ募集機関によって、同じ条件で遂行された。このような平時から戦時への横滑りは広範な地域で見られた。ただし、実際に戦線に行った経験は、出稼ぎ労働の場合とは大きく異なる影響を出身社会にもたらした。

(4) 女性の労働動員

本国における「総力戦」の時代、呼応して植民地における住民の広範な戦時動員が生まれたが、女性の直接的な戦時動員は、基本的には、生産労働の拡大と人のモビリティの拡大に伴ってもたらされたものであった。例えば缶詰産業のような、農業加工部門であり戦争遂行に深く結びついた部門での女性労働者の雇用が拡大したことは、農村＝都市関係の変化、ひいては農村部のジェンダー関係の変容を引き起こした。このことは、20世紀を植民地主義と脱植民地化のせめぎ合いという観点から見る場合、第一次世界大戦が大きな画期となったことを意味している。

(5) 女性の性的動員

植民地兵の動員にともなう女性の動員は、前述の植民地兵の二つのタイプの重点の変化と関係していた。タイプAは総じて家族を伴う形態での勤務が基礎となっていたが、タイプBにおいてはそうではなく、そこに、兵士と性、という問題が発生した。

植民地の場において軍による女性の強制的動員が制度として存在したことを確認できたのは、第二次世界大戦期の日本軍「慰安婦」制度以外に、本研究の範囲では、フランスの「野戦売春所」(BMC)である。これはとくに第一次世界大戦以降、植民地女性を大きく巻き込むことになった。

一方、フランス軍のような制度となっていない場合にも、イギリス統治下東アフリカの「アスカリ」における疑似婚姻制度のように、事実上の強制的性動員が存在した。さらに、20世紀後半の植民地解放戦争においては、旧宗主国側のみならず解放運動側にも性的動員が広範に見られた。

(6) 植民地間の移動

戦時の労働動員は、単に帝国中枢からの要請による個別植民地からの動員として実行されたのではなく、しばしば複数植民地(公式植民地以外の従属地域を含む)間の人々のモビリティと結びついていた。たとえば、アジアの場合で言えば、沖縄・朝鮮・台湾・南洋の間の移民の歴史と不可分であった。これらの移動は「帝国」の経済構造を背景とするものの、そこにある人々のエージェンシーの問題も無視することができない。

(7) 第一次世界大戦期の特質と位置

植民地征服戦争における植民地兵の動員

から世界戦争における植民地兵の動員への変遷は、おおむね、前述のタイプAからBへの変化と対応しており、より多くの植民地住民(男女)が動員の対象となっていくことを意味した。そのことは、「帝国」的な戦争のあり方が、やがて解放戦争にも深く影響を与える背景ともなったことは、(5)で述べた女性の性的動員の側面に顕著なとおりである。

植民地兵の大規模動員が行われた第一次世界大戦期は、脱植民地化の歴史の中で見れば、支配と抵抗という二分法的図式には収まらない脱植民地化の主体の形成過程において決定的な意味をもっていたことがわかる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計13件)

難波 ちづる、本国から祖国へ-戦後フランスのインドシナ復帰と在仏ベトナム人労働者の送還問題、三田学会雑誌、査読無、第108巻2号、83-108。

眞城 百華、エチオピア・ティグライ州における政治と女性：ティグライ女性協会の活動を中心に、女性学研究、査読無、第23巻、2016、67-75。

永原 陽子、「戦後日本」の「戦後責任」論を考える-植民地ジェノサイドをめぐる論争を手がかりに、歴史学研究、査読有、第921巻、2014、1-10(+22)。

瀧辺 泰雄、第二次世界大戦期のビルマ先生に出征したローデシア・アフリカ人ライフル部隊(現ジンバブウェ)のアフリカ人兵士からの手紙：全文訳(2/2)、明治大学国際日本学研究、査読有、7(1)、2015、65-86。

Yumiko IMAIZUMI, The Marianas under Japanese Navy Administration (1914-1922), E-publication (http://guampedia/docs/mhc_history_bookpft#), The 2nd Marianas History Conference: One Archipelago, Many Histories, Integrating our Narratives, refereed, vol.2, 2013, 287-300.

Chizuru NAMBA, La France face aux process de Saigon et de Tokyo, Outre-Mers, Revue d'histoire, refereed, No. 380-381, 2013, 313-331.

Akiyo AMINAKA, Transition in Immigration Policy: Inclusion and Exclusion in the South African State after Democratization, IDE Spot Survey(33)/ Public Policy and Transformation in South Africa after Democratization, refereed, 33, 2013, 103-121.

網中 昭世、第一次世界大戦期のポルトガル領アフリカ植民地における労働移動-モザンビークおよびアンゴラからのサ

ン・トメへの移民を中心に、アフリカ研究、査読有、No.82、2013、15-32。

網中 昭世、南部アフリカにおける植民地支配と人の移動-ポルトガル領モザンビーク・アンゴラにおける移民送り出し要因の連関-、総合研究、査読無、第6号、2013、18-37。

Yumiko IMAIZUMI, Colonialism and Chamorros in Japanese Mandated NMI: A Review of Tadao Yanaiharas Studies on Micronesia, Late Colonial History. Part five of seven, books from the Marianas History Conference: One Archipelago, Many Stories (June 14-16, 2012), refereed, five of seven, 2012, 43-62.

浅田 進史、植民地権力と越境のポリテイクス-膠州湾租借地におけるドイツ統治を再考する、境界研究、査読有、第3巻、2012、117-134。

網中 昭世、南部アフリカにおける植民地支配と人の移動-ポルトガル領モザンビーク・アンゴラにおける移民送り出し要因の連関、総合研究、査読無、第6巻、2012、18-37。

難波 ちづる、第二次世界大戦後におけるフランスのインドシナ復帰 - 戦時期の清算と対日本人戦犯裁判 -、三田学会雑誌、査読無、第104巻2号、2011、27-54。

[学会発表](計28件)

Yoko Nagahara, South African Black Soldiers/Labourers in World War I, Captives, recruited, migrants: Empires and labor mobilization, 17th century to present days (EHESS, Paris), Oct. 2nd, 2015, Collège de France, Paris, France.

Toshie AWAYA, The Meaning of Migration for Dalit Women in Modern India: From their Autobiographies, 3rd Conference of Asian Association of World Historians (国際学会), May 29th-31st, 2015, Singapore.

Momoka MAKI, Women's Fighter in TPLF-Women's Agency in the Struggle and Post-Conflict Society, 19th International Conference on Ethiopian Studies (国際学会), Aug. 26th 2015, Warsaw, Poland.

永原 陽子、メンディ号事件とケープ社会-アフリカの第一次世界大戦①-、日本アフリカ学会第51回学術大会、2014年5月25日、京都大学(京都市)。

永原 陽子、植民地責任論におけるナショナリズムの克服-「慰安婦」の比較史から考える-、東北歴史財団国際学術会議「植民地責任の清算の世界的動向と課題」、2014年11月28日、東北歴史財団(韓国、ソウル)。

栗屋 利江、イギリスのインド支配を再

考する、東北歴史財団国際学術会議「植民地責任の清算の世界的動向と課題」、2014年11月28日、東北歴史財団(韓国、ソウル)。

Toshie AWAYA, Indian Intellectuals' Perception on Japanese Occupation on Korea, Shiv Nadar University (SNU) and Contemporary India Area Studies (INDAS) Conference, Dec.13rd -15th, 2014, New Dehli, India.

眞城 百華、越境者から見るエチオピア・エリトリア関係、日本アフリカ学会第51回学術大会、2014年5月25日、京都大学(京都市)。

Shinji ASADA, The Siege of Tsingtao in 1914, International Committee of Historical Sciences, Colloque International "From the Balkans to the World: Going to War (1914-1918). A Local and Global Perspective", Nov. 15th, 2014, UNESCO, Paris, France.

Chizuru NAMBA, Returning Home from the 'Home Country': Reparation Issue of Indochinese Laborers in the Post-World War II Period, French Colonial History Society, Jun. 26th-27th, 2014, Pannasastra University Siem Reap, Cambodia.

Chizuru NAMBA, The Intersection of French and Japanese Colonialism: French Indochina during World War II, Thirty Years of Crisis: Empire, Violence, and Ideology in Eurasia from the First to the Second World War, Jun. 10th-11st, 2014, Slavic-Eurasian Research Center, University of Hokkaido.

Chizuru NAMBA, French-Japanese 'Coexistence' in Indochina during World War II, International Conference on Culture, Society, and History of Contemporary Vietnam, Oct. 30th, 2014, Center for Asia-Pacific Area Studies, Academia Sinica, Taipei, Taiwan.

Ch'ang-u, SHIN, Korea and the First World War (朝鮮と第一次世界大戦)、国際関係史学会 CHIR-Japan「国際社会に登場したアジア・太平洋-第一次世界大戦と日本」、2014年12月6日、国際交流基金さくらホール(東京都)。

網中 昭世、労働市場の変容と戦時動員-アフリカの第一次世界大戦②-、日本アフリカ学会、2014年5月25日、京都大学(京都市)。

Yoko NAGAHARA, Colonial Violence/Colonial Guilt/Colonial Responsibilities in World History, 高麗大学文化大学韓国史学科講演会(招待講演) 2013年10月17日、高麗大学文化大学(韓国、ソウル)。

- 永原 陽子、植民地ジェノサイドと世界史-植民地主義と全体主義の連続性をめぐる最近の議論から、「植民地研究の最前線」第4回(招待講演) 2013年10月18日、高麗大学文化大学(韓国、ソウル)。
Chizuru NAMBA, Propagandes et rivalite culturelles dans l'Indochine de Decoux, De l'Indochine colonial au Vietnam actuel, Mar. 21st, 2014, L'Academie des sciences d'outre-Mer, Paris, France.
- 網中 昭世、第一次世界大戦アフリカ戦線における抵抗と抑圧-モザンビーク北部およびアンゴラ南部の比較研究のための予備的報告-、本アフリカ学会第50回学術大会、2013年5月25日、東京大学駒場キャンパス(東京都)。
- 永原 陽子、現代史の中の「植民地責任」-アフリカ植民地を中心に、東亜歴史財団シンポジウム「韓日体制と『植民地』責任の再照明」(招待講演) 2012年6月22日、東亜歴史財団(韓国、ソウル)。
- 眞城 百華、境界、民族と国際関係 エチオピア・エリトリアにおけるティグライの経験、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・公開シンポジウム「境界/Border in Africa-メディア・民族・宗教の視点から」、2012年12月16日、東京外国語大学(東京都府中市)。
- 21 浅田 進史、1930年代の青島経済-日本占領の経済的衝撃、政治経済学・経済史学会、2012年11月10日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)。
- 22 今泉 裕美子、旧南洋諸島における朝鮮人の戦時労働動員、在日済州人センター開館記念国際学術会議(招待講演) 2012年12月8日、在日済州人センター。
- 23 今泉 裕美子、日本帝国崩壊期「引き揚げ」の比較研究において「問題提起」及び「パラオ諸島における『引き揚げ』」(1943~46年)。
- 24 浅田 進史、青島におけるドイツ植民地統治 20世紀初頭の東アジア経済・世界経済のなかに位置づける、東京大学経済史学会、2011年10月31日。
- 25 浅田 進史、植民地における軍事的暴力と社会創造 ドイツ植民地統治の事例から、歴史学研究会大会近代史部会、2011年5月22日、青山学院大学(東京都渋谷区)。
- 26 浅田 進史、日独青島戦争におけるドイツ総督府の戦時動員、日本西洋史学会第61回大会、2011年5月15日、日本大学(東京都世田谷区)。
- 27 愼 蒼宇、朝鮮半島の「内戦」と日本の植民地支配 韓国軍事体制の系譜、歴史学研究会近代史部会、歴史学研究会近代史部会、2011年5月22日、青山学院大学(東京都)。
- 28 溝辺 泰雄、第二次世界大戦期の英領黄金海岸に拘留された『日本人』抑留者に関する予備的報告、日本アフリカ学会第48回学術大会、2011年5月21日、弘前大学(弘前市)。
- (図書)(計20件)
- 宇山 智彦(編)、ミネルヴァ書房、ユーラシア近代帝国と現代世界、2016、280(粟屋 利江担当部分97-120)。
- 網中 昭世、ミネルヴァ書房、南アフリカ:「虹の国」への道のり、2016、未定。
- 坂本 悠一、吉川弘文館、帝国支配の最前線:植民地(地域の中の軍隊7)、2015、320(今泉 裕美子担当部分260-299)。
- Gloria Chuku ed., Carolina Academic Press, Ethnicities, Nationalities, and Cross-Cultural Representations in Africa and Diaspora, 2015, 363(Yasu'o MIZOBE, 担当部分163-182)。
- 歴史学研究会・日本史研究会(編)、岩波書店、「慰安婦」問題を/から考える、2014、278(永原 陽子担当部分63-79)。
- 小野塚 知二(編)、岩波書店、第一次世界大戦開戦原因の再検討-国際分業と民衆心理、2014、256(浅田 進史担当部分69-88)。
- 李 成市他(編)、岩波書店、岩波講座日本歴史第20巻(地域編)、2015、366(今泉 裕美子担当部分265-294)。
- 網中 昭世、山川出版社、植民地支配と開発、2014、308。
- 和田 春樹・後藤 乾一・木畑 洋一・山室 信一・趙 景達・中野 聡・川島 真、岩波書店、東アジア近現代通史:19世紀から現在まで下、2014、272(中野 聡担当部分93-134)。
- 趙 景達、原田 敬一、村田 雄二郎、安田 常雄(編)、有志舎、東アジアの知識人①-文明と伝統社会、213(愼 蒼宇担当部分344-362)。
- 趙 景達、原田 敬一、村田 雄二郎、安田 常雄(編)、有志舎、東アジアの知識人②-近代国家の形成、2013、370(愼 蒼宇担当部分344-362)。
- 高嶋 修一・名武 なつ紀(編)、日本経済評論社、都市の公共と非公共-20世紀の日本と東アジア、2013、277(浅田 進史担当部分23-56)。
- 柳沢 遊・木村 健二・浅田 進史(編)、慶應義塾大学出版界、日本帝国勢力圏の東アジア都市経済、2013、339(浅田 進史担当部分297-326)。
- 本庄 比佐子・内山 雅生・久保 亨(編)、東洋文庫、華北の発見、2013、355(浅田 進史担当部分23-56)。
- 趙 景達(編)、有志舎、近代日朝関係史、2012、384(愼 蒼宇担当部分303-328)。
- Chizuru NAMBA, Edition Karthala, Paris, Francais et Japonais en Indochine (1940-1945), Colonisation, propaganda et rivalite, culturelle, 2012, 279。

中野 聡、岩波書店、東南アジア占領と日本人-帝国・日本の解体、2012、320。
駒井洋・小倉充夫編、明石書店、ブラック・ディアスポラ、2011、264(網中 昭世担当部分 135-158)。
鴨下重彦(編) 東京大学出版会、矢内原忠雄、2012、351(今泉 裕美子担当部分 130-162)。
趙景達(編) 東京堂書店、植民地朝鮮、2011、321+iv(愼 蒼宇担当分: 19-49)

[その他]

ホームページ等

<http://www.aa.tufs.ac.jp/users/kakensyo/kuminchiido/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永原 陽子(NAGAHARA, Yoko)
京都大学・大学院 文学研究科・教授
研究者番号: 90172551

(2) 研究分担者

浅田 進史(ASADA, Shinji)
駒澤大学・経済学部・准教授
研究者番号: 30447312
網中 昭世(AMINAKA, Akiyo)
アジア経済研究所・地域研究センター・研究員
研究者番号: 20512677
粟屋 利江(AWAYA, Toshie)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 00201905
石川 博樹(ISHIKAWA, Hiroki)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号: 40552378
今泉 裕美子(IMAIZUMI, Yumiko)
法政大学・国際文化学部・教授
研究者番号: 30266275
大久保 由理(OKUBO, Yuri)
日本女子大学・人間社会学部・研究員
研究者番号: 20574221
愼 蒼宇(SHIN, Ch'ang-u)
法政大学・社会学部・准教授
研究者番号: 80468222
鈴木 茂(SUZUKI, Shigeru)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 10162950
難波 ちづる(NAMBA, Chizuru)
慶應義塾大学・経済学部・准教授
研究者番号: 20296734
中野 聡(NAKANO, Satoshi)

一橋大学・社会学研究科・教授
研究者番号: 00227852
眞城 百華(MAKI, Momoka)
上智大学・総合グローバル学部・准教授
研究者番号: 30459369
溝辺 泰雄(MIZOBE, Yasuo)
明治大学・国際日本学部・専任准教授
研究者番号: 80401446

(3) 連携研究者

飯島 みどり(IIJIMA, Midori)
立教大学・異文化コミュニケーション学部・准教授
研究者番号: 20252124

(4) 研究協力者

松田 素二(MATSUDA, Motoji)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号: 50173852
上杉 妙子(UESUGI, Taeko)
専修大学・文学部・兼任講師
研究者番号: 90260116
丸山 淳子(MARUYAMA, Junko)
津田塾大学・国際関係学科・准教授
研究者番号: 00444472
小川 了(OGAWA, Ryo)
東京外国語大学・名誉教授
研究者番号: 60124228
シャール・ジェッピー(Shamil JEPPIE)
ケープタウン大学・アフリカ人文研究所・教授
ピエール・サネ(Pierre SANE),
イマジン・アフリカ研究所(ダカール)・代表
テケステ・ネガシュ(TEKESTE Negash)
ウブサラ大学・名誉教授